

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」 平成27年度第2回推進会議の概要について

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」の平成27年度第2回推進会議を、平成27年12月16日（水）に開催しました。

第2回推進会議には、7名の委員のうち5名の方々にご出席いただくとともに、会議の進行を補助するファシリテーターとして国立大学法人三重大学教育学部教授の山田 康彦氏にご出席いただきました。

なお、第2回推進会議の概要は、以下のとおりです。

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」委員及びファシリテーター

敬称略、50音順、カッコ書は役職

- 安藤 大作（三重県PTA連合会 顧問）
石川 正浩（サポーターいっちゅう 事務局次長兼広報部長）
石川委員はご欠席
田尾 友児（三重県立紀南高等学校 学校運営協議会 委員）
竹内 勇夫（伊勢市立小俣中学校 校長）
西岡 慶子（株式会社光機械製作所 代表取締役社長）
西岡委員はご欠席
藤田 曜久（三重県立相可高等学校 校長）
山田 忍（スクールカウンセラー）

ファシリテーター

- 山田 康彦（国立大学法人三重大学 教育学部 教授）

< 推進会議の進行概要 >

会議の大きな進行は以下のとおり

開会 15:00

- ・教育長あいさつ
- ・事務局による資料の概要説明
「平成27年度上半期の取組評価と平成28年度の取組方向」
「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果」

プロジェクト推進についての意見交換

- ・本年度の展開等について意見交換を実施

次回（第3回）の開催予定

閉会 17:00

（山口教育長あいさつ、県事業の説明）

冒頭、山口教育長から委員の皆さんに本日の会議の開催趣旨について説明しました。



その後、事務局より資料に基づき、「平成27年度上半期の取組の評価と平成28年度の取組方向」及び「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果」について説明しました。

（プロジェクト推進についての意見交換）

続いて、山田教授の司会によりプロジェクトの推進に向けた意見交換を行いました。

各委員からは、日頃の活動を通じて感じる課題や子どもの学力向上に向けた本年度の展開等について、意見や提案をいただきました。

委員からの主な意見

不登校については、20年前は大変な事態だと学校も保護者も受け止め、対応が熱心であった。今は、小学校の教員は危機感を持って一生懸命動いているが、中学校の教員は不登校に慣れてしまい、教員によって動きに格差が出ている印象がある。家庭の力もなくなっており、不登校が特別でないととらえ親が積極的に動かない場合や、貧困等複雑な背景の不登校も増えている。

○学力を上げるには、先生、子ども、保護者の3者の人間関係が大切だ。この関係がよければ成績が上がっていくと思う。子どもや保護者が先生を批判しているようでは、学力は上がらない。このような声を減らすことが必要である。



○先生が嫌いでもなくても悪口を言うこともある。親に直接反抗できない子が先生や学校に悪口を言うケースもある。スクールカウンセラーの立場から言うと、親や先生に対する不信感をみせる発言は、子どもの発達を考えると、本心ではないこともある。

○校長や市町教委の本気度も重要だと思う。難しければ民間の力も入れていけばいい。子どもの心に灯をつけることが重要である。

○全国学調の結果を踏まえ、何を指すのが大切ではないか。あきらめない力など非認知のスキルも大切にしてほしい。校長の見回りの率が高くなって成績が上がるのか。校長と先生と一緒に授業を作っていくことが大事である。

○校長に必要なのは心意気であると感じている。新採の先生で心意気が感じられない先生が多く、周りのベテランの教員がサポートしてもうまくいかないときがある。やはり心意気が大事ではないか。

○学校は、いろいろな教師のいる集団であり、子どもはそのような中でうまく育つと思っている。校長はすべての子どもたちにとって同じ存在であり、しっかりしなければならない。子どもに生きる力が身につくように学校が安定した落ち着いた状態であることが大事である。



○全国学調の結果は、まだまだ全国を下回っているので頑張してほしい。なぜ低いのかを考えると、現場の危機感の持ち方や市町教委の指導が問題ではないかと思う。なぜ低いのかを分析すれば、改善の仕方が分かるのではないか。

○全国学調の結果から見える学力だけではなく、底力も含めてどうやって地域の教育力を高め、学力を高めていくか、基盤づくりが必要である。各学校の真剣な取組が何より重要ではないか。

○全国学調の結果の公開で、三重県は全国よりも数値が高いことは良いことだと思うが、保護者への情報共有などさまざまな質の違いがあるのではないか。学校・家庭・地域の方に教育や学力をどうしていくか学校単位で考えよう環境が大事ではないか。さらに情報公開を質的に高めていってほしい。



○中学校の事例で、朝読をやめて書くことを始めたところがある。読むことより書くことの方が言語環境にとって深いところがあると思う。全国学調の結果でも言語活動のつながりが大事であると報告されているので、そういう取組も大事ではないか。

○めあて・振り返りを勧めているが、振り返りのほうが少し低くなっている。分析報告書では、振り返りは学習が進まない子にとって大事な取組という結果が出ているので、振り返りにどういう意味があるのかについて先生にも伝えていかないといけない。ぜひ好事例を共有してほしい。

○教員は、子どもたちを良くしたいという方向性を持ってもらいたい。校長の見回りが学力向上につながるのには、先生の授業をみてアドバイスができることや、校長が若い先生をみることで、学習内容の確認ができ、授業改善につながる。これは管理職の仕事である。授業に入ってコミットメントしていくことが大事である。

○過疎地域には、勉強ができるようになったら外に出ていくことを危惧している保護者もいるが、過疎の中で生活をやりくりしていくには学習が必要だと思う。創造性、起業が求められる。田舎だからこそ学問が必要であることをしっかり唱えられる教職員集団を作っていくないと、若者の県外流出が続いていくと思う。また、教育支援事務所の設置の件もあるので、市町にはぜひ活用していただき、一緒にやっていきたい。

○地方創生が叫ばれ、「まち・ひと・しごと」がそのキーワードとなっている。一方で、地方から都会への人材流出は続いており、こうした中、小・中・高の教育現場においても「働く、生活する」場所としての、三重県の魅力を様々な形で伝えていくことが必要である。

○コミュニティ・スクールは制度がやや難解であり、認知度の向上も必要である。将来的には、学校支援地域本部への一本化についても検討することが必要であると思う。

など